



Title	風土を綴る文字のかたち : 図案文字をウェブメディアに応用する試み
Author(s)	Wang, Haojue
Citation	デザイン理論. 2026, 87, p. 132-133
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/103746
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

風土を綴る文字のかたち

— 図案文字をウェブメディアに応用する試み

WANG Haojue 京都芸術大学大学院在学

「読む」から「見る」へ——文字表現の再発見としての図案文字

今日のウェブメディアにおいて、文字は中立的で合理的な情報の容器として消費されることが多く、その視覚的特性や文化的背景をともなった個性はしばしば軽視される傾向にある。視認性・即時性を重視した現代のユーザーインターフェースにおいて、文字は可読性を最優先とした汎用フォントで統一され、その土地ならではの空気感や語りのリズムは画面上から失われがちである。このような「均質化された情報空間」において、文字本来の造形的ポテンシャルを回復することはできないだろうか。とりわけ地域文化をテーマとするコンテンツにおいては、文字のかたちそのものが「語り手」として機能し、風土や歴史の背景を静かに宿することができるのではないか。

本研究制作は、そのような問いを出発点に、京都芸術大学通信教育課程が発行する地域ウェブマガジン『アネモメトリ』の連載「風信帖」を題材として、掲載記事から抽出した語句を図案文字として再構成・可視化する実践である。「風信帖」は日本全国から寄せられる祭礼、民俗、食文化、風景、手工芸などの記事を通して、その地域に根ざした人々の営みや記憶を丁寧に描写している。本制作では、こうした記事群の中から 15 本（日本 6、中国 5、海外 4）を選定し、それぞれの内容から象徴的なキーワードを 3 語ずつ抽出。主たる語句は視覚的焦点として図案文字化し、残りの語句は補助的に併記しながら版面に配置することで、文字による視覚的アーカイブとして再構築を試みた。

この取り組みは、文字を「読む」ための記号から、「見る」ことによって意味と情緒を喚起する視覚表現へと再定義する実験的提案である。図案文字は、語句に含まれる意味や情景、感情を構造・筆画・装飾といった視覚要素に翻訳することで、テキストに新たな層を与える。これは、文字を再び「かたちのあるメディア」として捉え直すプロセスでもある。



図 1 記事キーワードを基にした図案文字試作

意味を宿す文字を設計する——キーワードの選定から図案化までの構築プロセス

本プロジェクトでは、制作の効率性と意味的妥当性の両立を図るため、初期段階に AI 技術を導入し、各記事の本文から頻出語や象徴性の高い語句を抽出。そのうえで、筆者が人間の視点から文脈的な解釈を加え、最終的な語句群を確定するという協働的アプローチを採用した。こうした工程により、テキストの解釈における主観的偏りを抑えつつ、記事が本来持つ土地性・記憶性を視覚的に抽出する道筋が整えられた。

文字の図案化にあたっては、以下の三つの観点を軸として構成方針を立てた。

第一に、文字構造の再解釈である。文字の骨格や部首配置を語句のもつ空間的イメージに即して再構成し、視覚的な「構え」を設計する。たとえば「闘牛」では、左右の文字を向かい合わせる構図にすることで、闘争と衝突のダイナミズムを造形化した。「階段状の街並み」では、文字自体を段差状に配置し、上下のリズムを通して高低差のある地形の印象を伝えている（図2）。

第二に、筆画のリズム構築に注目し、直線と曲線、太さや間隔などを操作することで、語句のテンポ感や質感を表現した。たとえば「ハイライン」では、すべての線を均一な直線で構成することで、都市の鉄骨構造を連想させる冷やかさを意図した。一方、「天津茶館」では太細の差を強調しつつ文字を圧縮し、中国的で親密な古風の空気を醸成している（図3）。

第三に、装飾要素の付与によって、素材感や地域性を文字に取り込んでいる。「蘭草編み」では繊維の編目パターンを筆画に重ねて手仕事の質感を強調し、「ねぶた」では和紙の張りや灯りの透過性を意識した透明感のある表現を施した。これらの造形は、文字に含まれる意味内容を視覚的に翻訳することで、読者が言葉に触れる前にその空気感や文脈に接続できるよう設計されたものである（図4）。

また、版面全体の設計としては、各図案文字にQRコードを添えることで、作品から記事本文への導線を確保し、文字が情報ナビゲーションの役割も果たすよう構成している。図案文字の視覚的吸引力と、情報アクセスの機能性を併存させたデザインを目指した。

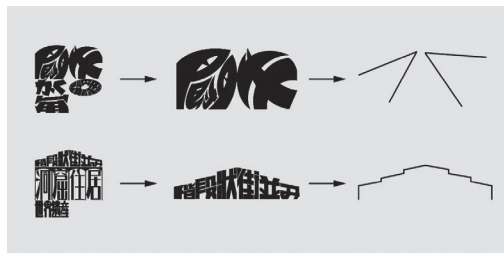


図2 「闘牛」「階段状の街並み」の構成例

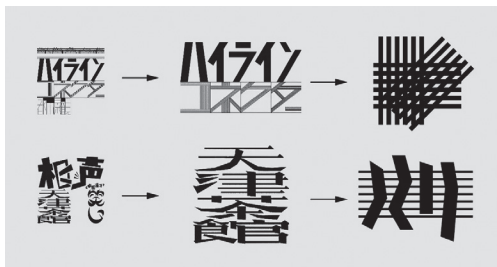


図3 「ハイライン」「天津茶館」の構成例

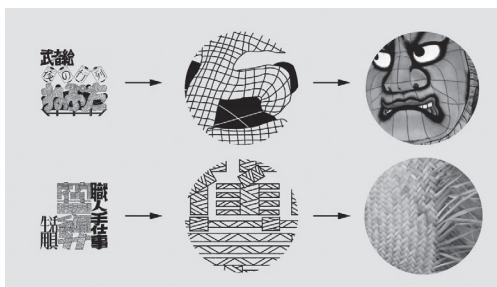


図4 「ねぶた」「蘭草編み」の構成例

風土を語る新たな視覚言語として — 図案文字の拡張性

図案文字の最大の特徴は、視覚と意味の接点を文字レベルで構築できる点にある。本プロジェクトでは、図案文字を単なる造形遊びとしてではなく、記事全体の「入口」となる視覚的装置として活用し、従来の「タイトル＋写真」的な誘導構造とは異なる多層的なメディア表現を実現した。スクロール主体のウェブ閲覧環境では、均質なビジュアルが流れるように消費されがちだが、造形化された文字は強い「視覚的引っかかり」となって読者の注意を留める。その結果、文字が伝える内容と空気感がより深く浸透する回路が生まれる。

さらに、図案文字は視覚的要素に文化文脈を内包できる点において、地域文化を可視化する強力なメディアとなりうる。たとえば「風信帖」の記事には、観光情報としてではなく、土地に根づいた人々の語りが存在しているが、そのようなナラティブな要素を文字構造そのものに転写することで、土地の記憶が視覚的に定着される構造が生まれる。